

□原著論文□

軽費老人ホーム居住者が行う認知症デイ利用者との
交流・支援活動についての一考察

市川 光代* 岩下 清子**

抄 録

在宅生活に不安を感じた高齢者が軽費老人ホームに入居すると、職員の保護により安心が得られる反面受け身になり、自ら主体的行動を自粛し社会生活を狭める傾向がみられる。

本研究では、軽費老人ホーム職員の勧めにより、ホーム居住者 50 人のうち 80 歳以上の 5 人が、ホームと同じ建物にある認知症デイサービスで交流・支援活動を始めてから約 3 年余りの間に生じた変化を追跡し分析した。結果、ホーム居住者は、認知症デイ利用者との関わりに戸惑いながらもデイ利用者との間にピアサポートの関係が生じた。またデイ職員との間には、お互いの立場を超えて尊重し合える関係が生じ、居住者自身は人に役立つ存在であることを実感し、それが生きがいとなって生活が活性化した。このことから、高齢者の持てる力に目をむけ、他者との交流や活動の場を提供し見守ることは、ホーム居住者の生活活性化と自立維持に向けた試みとして、効果的であることが明らかになった。

これらのことは、軽費老人ホームに限らず多様な生活支援付き高齢者集合住宅においても、居住する高齢者同士の関係性維持及び生活活性化に向けた支援として活用できると考える。

キーワード：軽費老人ホーム居住者、認知症デイ利用者、ピアサポート、生活活性化

**Study of relationship between residents of a nursing home and
people with dementia in a day care center and their successive
support activities**

ICHIKAWA Mitsuyo and IWASHITA Kiyoko

Abstract

When elderly people who no longer feel comfortable living independently enter nursing homes, they may enjoy a feeling of security due to the care provided by the staff, but they also tend to become more passive and limit their daily activities, leading to a restricted social life.

In the present study, we followed up nursing home residents who, at the suggestion of the nursing home staff, maintained relationships with and provided support for people with dementia who attended a day care center. We analyzed the changes observed in

受付日：2012年9月6日 受理日：2013年2月19日

*国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 先進的ケア・ネットワーク開発研究分野 博士課程 2012年3月修了 (現職)三育学院大学 看護学部 看護学科

Division of Development of Care Network, Doctoral Program in Health and Welfare Sciences, Graduate School of Health and Welfare Science, International University of Health and Welfare in 2012 (Present office) Saniku Gakuin College School of Nursing

E-Mail : ichikawa@saniku.ac.jp

**元国際医療福祉大学大学院 先進的ケア・ネットワーク開発研究分野

Former Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare

these subjects over a period of approximately 3 years. The subjects were 5 people in 80 years of age or older who were selected from among 50 residents of a nursing home. The day care center was located in the same building as the nursing home. Our analysis showed that the 5 subjects established peer support relationships with the people who visited the day care center, even though they experienced some confusion. They also established good relationships with the staff of the day care center, with both parties showing respect for the other despite the differences in their social positions. The subjects realized that they were able to help other people, which gave them a reason for living and improved their quality of life.

The findings of this study show that focusing on the potential of elderly people and providing them with a place where they can be active and interact with (and support) other people can revitalize the lives of nursing home residents and help them regain and maintain their independence.

These findings may also be applicable to apartment complexes for the elderly with various types of support services as well as inexpensive nursing homes. Specifically, this approach may be useful for helping elderly residents maintain valuable social relationships and thus improve their quality of life.

Keywords : Nursing home residents, People with dementia visiting a day care center, Peer support, Improved quality of life

I. はじめに

子どもと同居しない高齢者の増加、高齢期の長期化等により、いかに健康で自立した高齢期を送れるかが個人にとっても社会にとっても大きな課題となっている。佐藤ら¹⁾は、85歳以上の男女でも6割以上が家庭内役割を持っており、役割を持つことは生活活動力と精神的活力に有意に関連していると述べており、家族や地域社会が高齢者の役割を見直し、創造するための仕組みを作る必要性を示している。また、活動力の衰えや身体機能の低下により生活支援機能付き集合住宅に住み替える高齢者もいる。近年、多様な生活支援付き高齢者集合住宅²⁾が提供されているが、長い歴史を持つ軽費老人ホームも、戸建住宅で生活することに不安を覚えるようになった高齢者の住み替え先³⁾として機能している。しかしホームに入居すると住と食が保障され、職員が常駐していることから安心が得られる反面、受け身になりやすく自ら主体的行動を自粛し社会生活を狭める傾向がみられる。

A 軽費老人ホーム(以下「ホーム」という)では、同じ建物内で実施されている(以下「併設」という)認知症デイサービス(以下「デイ」という)から、デイ利用者と交流しながらレクリエーション活動を一緒にして欲しいとの依頼を受けた。この依

頼を受けたホームでは、居住者の生活活性化と自立維持に向けた試みとして居住者 50 人のうち 5 人を選び、デイでの活動を勧めた。この活動を始めてから次第に、ホーム居住者 5 人(以下「居住者」という)と認知症デイ利用者との関係、及び居住者自身の生活が次第に活性化したことから、その成果を報告する。

II. 研究目的

軽費老人ホーム居住者 5 人による認知症デイサービスでの交流・支援活動を通して、居住者と認知症デイ利用者との関係、及び居住者自身の気持ちや生活にどのような変化が生じたのかを明らかにすることにより、生活支援機能付き高齢者集合住宅における、居住者の他者との関係性維持及び生活の活性化に向けた支援のあり方について示唆を得る。

III. 調査方法

1. 居住者の基本属性と選定理由

A氏 80代男性

80歳代後半ではあったが、まだまだ心身ともに余力があったため、自立生活維持を目標とした。また、デイから囲碁のできる人を要請されていたこともあって勧めた。

B氏 80代女性

ホームに入居したが馴染めず「人間、役に立たんようになってきたら生きていく価値がない。誰かの役に立ちたい」と口癖のように言っていた。役割を見つけ生活の活性化を図ることを目標として勧めた。

C氏 80代女性

40年間地域でのボランティア活動を継続しており、他の4人のサポート役として、本人の持てる力を活かすことを目標として勧めた。

D氏 80代女性

ホーム内での人間関係のストレスから不定愁訴が多くなり、居室に引きこもり状態となっていたため、心身の健康と活性化を図る目的で勧めた。

E氏 80代男性

ケアハウスに居住していた経験があり、居住者を集めては歌を歌っていたとのことであった。ホーム入居後も何かの活動をしたいとの希望を持っており、持てる力への支援を目標として勧めた。

2. 調査期間：2008年6月～2012年2月

3. 調査フィールド及びホーム居住者が行うデイ利用者との交流・支援活動の概要

1) フィールドの概要：1階が認知症対応型デイサービス(1日10～12人利用)、2階が特別養護老人ホーム(50人利用)、3～4階が軽費老人ホーム(50人居住)の複合型施設である。

2) 認知症デイサービスの概要：利用者の年齢は59歳～93歳で、認知度は軽度～中等度であり、

介護度は平均2.9である。疾患としてアルツハイマー病8人、レビー小体病2人、残りは主に脳血管性の疾患からくる認知症である。

利用者の支援をしている職員は非常勤を含む6人で、その内訳は社会福祉士1人、介護福祉士2人、ヘルパー3人である。

3) 交流・支援活動の概要：ここで取りあげる活動は、軽費老人ホーム居住者の生活活性化に向けた支援として職員の勧めで始まったもので、居住者5人が週に2～3回、併設デイに出向き、デイ利用者と交流しながら活動(ちぎり絵・囲碁・料理教室・音楽・手芸・散歩など)を一緒に行ったり、デイ職員の作業補助(洗濯物たたみ・繕い物・茶話会の手伝い・料理教室の手伝いなど)を一緒に行っている。尚この活動にはデイ職員6人全員が関わっている。

この活動を行っている5人の属性と活動内容は、表1のとおりである。

4. データ収集の方法

1) 半構造化インタビューを行い、録音して逐語録を作成した。対象者はデイで活動を行っているホーム居住者5人と、デイに通所する認知症利用者の支援に関わる職員全員6人である。インタビュー調査は、ホーム居住者とデイ職員に対して、活動開始前と直後の思いを振り返る目的で、2ヶ月目である2008年8月に実施した。また、3年近く経過した時点でも5人の居住者全員が活動を継続していたため、3年目である2011年6月に居住者とデイ職員に対して2回目のインタビューを実施した。

表1.活動を行っているホーム居住者の属性と活動内容

居住者	性別	年齢	自立度	治療中の疾患	職業歴	デイでの活動内容
A氏	男	80歳代	自立	高血圧症・胃癌術後	会社員	囲碁の相手30分 週1回
B氏	女	80歳代	自立	特になし	主婦	外出支援・活動補助 随時
C氏	女	80歳代	自立	高血圧症・腰痛	主婦	活動補助 半日程度週2日
D氏	女	80歳代	要支援	不定愁訴・腰痛	看護師	話し相手・活動補助 週2日
E氏	男	80歳代	自立	高血圧症	会社員	オルガン伴奏1時間 週2日

インタビューの内容は以下のとおりである。

(1)ホーム居住者に対して

①2008年8月

- ・認知症デイサービスで活動をするこゝについて
- ・活動をはるめる前と実際にはるめてからの気持ちの変化

②2011年6月

- ・デイ利用者との関係及びデイ職員との関係
- ・活動を続けるうゑでの居住者自身にとっての意味

(2)デイ職員に対して

①2008年8月

- ・居住者をデイ利用者の交流相手として受け入れようと考えたきっかけ
- ・受け入れ直後の居住者の様子とその後の変化

②2011年6月

- ・デイ利用者と居住者の関係性の変化
- ・居住者に対する期待

2) 補足調査

筆者はAホームの看護師であったことから、ホーム居住者とホーム職員に対して、インフォーマル・インタビュー及び参与観察を行った。また、デイにも週に1回程度出向いて、居住者の活動状況やデイ利用者とデイ職員の関係などを2012年2月まで継続して参与観察を行った。それらの結果は、インタビュー結果を補足するデータとして活用した。

5. 半構造化インタビューの分析方法

居住者5人とデイ職員6人のインタビューの逐語録の中から研究目的に関連した語りを文字データとして抽出し、要約して中心的意味とした。次に類似性のある中心的意味をまとめてサブテーマとし、更にサブテーマの類似性を見ながら抽象度を上げてテーマとした。そして、テーマ、サブテーマを関連づけることによって居住者の変化を明らかにした。一方のデイ職員6人のインタ

ビューについても同様に進めていき、居住者の様子や居住者とデイ利用者の関係性の変化、及びデイ職員の居住者に対する期待が変化していく過程を明らかにした。

6. 倫理的配慮

今回の研究をはるめるにあたり、国際医療福祉大学の示す手順に従って倫理審査委員会が必要とする書類を作成し倫理審査委員会の承認を得た(承認番号10-8)。

承認が得られたことにより、軽費老人ホーム居住者と職員、デイサービス職員及びデイ利用者 と利用者の家族に研究の趣旨を口頭と文書で説明し、同意書に署名をいただいたうゑでICレコーダーに録音した。録音したものを文字データとして使用する際には、本人ができるだけ特定できることのないように配慮しつつ、特定できる記述については本人の了解を得た。また、研究の途中で中断しても良いこと、同意を撤回しても何ら不利益を生じることがないということも口頭と書面で説明した。

III. 結果

1. 居住者が交流・支援活動を勧められてから自分にとっての意味を見出すまでのプロセス

5人の居住者に対するインタビューの逐語録を分析したところ、表2の結果が得られた。

以下の文章では、テーマを【 】で、サブテーマを< >で、中心的意味を“1~24”で、語りは「 」で示す。

ストーリーライン

ホーム居住者5人は、デイ利用者との交流を目的として、ホーム職員から勧められ【交流・支援活動のきっかけが与えられた】。以前から人の役に立ちたいと思っていた人は<喜んで引き受けた>と語り、一方、職員に勧められたが自信がないので断った。しかし、再三勧められたので<頼まれたので始めた>という認識であった。デイ

表 2. 居住者の交流・支援活動に対する思い

中心的意味	サブテーマ	テーマ
1. 人の役に立ちたいから喜んで引き受けた 2. 支援活動をしたいと思っていた	喜んで始めた	交流・支援活動のきっかけが与えられた
3. 分からないまま始めた 4. 躊躇しながら始めた	頼まれたから始めた	
5. 利用者が怖い 6. 認知症が理解できない 7. 話が續かない 8. 怒らせないように緊張した	対応に戸惑う	デイ利用者との関係性の变化
9. 利用者に付いて歩く 10. 自分から先に謝る 11. 自分の言動に共感する	相手に合わせる	
12. 出しゃばらない 13. 心地良く居られる場を作る 14. 自分と同じように相手のことを考える	気配りをする	
15. 優しい気持ちになる 16. 一緒に若返る 17. 心が通じ合う 18. おしゃべりが楽しい	関わりを楽しむ	
19. 認知症が分かってきた	認知症に対する理解	
20. 職員は休む暇がない 21. 介護現場の現実を見る 22. 職員を助けたい	介護の仕事に対する理解	
23. 受け身ではなく、してあげることが嬉しい 24. 感謝されることが嬉しい	人の役に立つことが自分の喜び	

に行き始めた当初、認知症ということが理解できず<対応に戸惑>いながらも、訳が分からないままデイ利用者に付いて歩くなど試行錯誤を繰り返しく<相手に合わせる>といった行動をとった。更に、デイ利用者が混乱しないように、その場所が過ごしやすい場であるようにと<気配り>を行った。そうするうちに利用者との<関わりを楽しむ>ことができるようになり、【利用者との関係性が変化】していた。また、デイ利用者と一緒に過ごす時間が多くなるにつれて、【認知症に対する理解】が生まれ、認知症状を持つ人との関わりが苦痛ではなくなっていた。更に、介護の仕事は大変であるから、少しでも職員の役に立ちたいと【介護職に対する理解】を持つようになった。居住者らは、デイ利用者と職員から感謝の気持ちを伝えられることによって【人の役に立つことが嬉しい】との思いを持つようになり、デイで活動することの自分自身にとっての意味を見出して

いた。

以下は、前述したストーリーラインに沿ってテーマごとに居住者の語りを引用しつつ説明する。

【交流・支援活動のきっかけが与えられた】

ホームに入居したが馴染めず「人間、役に立たんようになったら生きていく価値ない。誰かの役に立ちたい」と口癖のように言っていた居住者は、職員からデイでの活動を勧められ、「1. 人の役に立ちたいから喜んで引き受けた」。「ホームに入ってからずっとボランティアのようなことをしたいと思っていたところでした」と語った居住者は、「2. 支援活動をしたいと思っていた」と、日頃の思いが叶い<喜んで始めた>という積極的な姿勢であった。一方、「僕はデイってところが分からないけど、囲碁のできる相手として頼まれたんだらうね」との語りから、「3. 分からないまま始めた」という状況にあり、「話し相手に行

ってくれないかって言われたけど自信がなくて」と語った居住者は、「4. 躊躇しながら始めた」という思いを持っており、「頼まれたから始めた」という受け身の姿勢であった。

【利用者との関係性の変化】

実際にデイの現場に入った居住者は、認知症利用者との関わりに困惑し「戸惑う」となっていた。「やんちゃする男の人がいて、デイの利用者さんは恐かったです」と「5. 利用者が怖い」と認識し、「碁をやっている突然五目並べになったり、碁盤の上の碁石をぐちゃぐちゃにし始めてびっくりした」と、デイ利用者の突然の行動に「6. 認知症が理解できない」でいた。また、話し相手として依頼されたのだが「7. 話が續かない」と悩んでいた、「8. 怒らせないようにしようと思って緊張した」と、居住者の困惑した様子が伺えた。

居住者たちが、デイで交流・支援活動を始め、3ヶ月が経過した頃から居住者は、デイ利用者につき合って利用者の行動を興味深く観察しており、そのことを熱心に語っている。その語りの中から、認知症の人への対応の試行錯誤が読み取れた。

ある居住者は「相手に合わせる」行動をとっていた。「部屋が分からないって言うから、どこだろうねって一緒に廊下をひと回りする。また分からんよって言うから付き合っ一緒に歩くと」と、「9. 利用者に付いて歩く」。また、デイ利用者が「怒りそうになったら「10. 自分から謝ってしまう」そうするとそれ以上怒らない」と言い、「トイレに何回も行くから聞いてみたら、私の居る場所がないって言うの。私もはじめは居場所がなくて困りました。みんな同じですね」と、「11. 相手の言動に共感」していた。居住者はそれぞれに意識的にデイ利用者への「気配り」をしていた。「普段うとうとして座ってばかりいるおばあさんやおじいさんが、しゃきっとしてうどんを作りなされるよ。そういうときに「12. 出しゃばらない」ように気をつけなくちゃね」また、

「家に帰りたいがって落ち着かない男の利用者さんに、お宅様はどちらからいらしたのですか、お見かけしたところ紳士ですねって声をかけたら落ち着いてくれたんです。相手を立てて居心地良くしてあげればいいのかって思いました」と、「13. 居心地よく居られる場を作る」ことに意図した言葉がけをしていた。また、「風邪をひかないように気をつけている。利用者さんに風邪をうつしたら本人も家族も大変だからね」と相手の身体を思いやるなど、「14. 自分と同じように相手のことを考える」といった気配りをしていた。ホーム居住者は、デイ利用者と過ごす時間が多くなると同時に「関わりを楽しむ」ことができるようになっていた。

「足が痛いって言うから見たら、靴を左右反対に履いているのね。取り替えてあげたら、ありがとって嬉しそうに言ってくれて、私まで嬉しくなって「15. 優しい気持ちになれる」と語った。音楽活動に参加して「皆と一緒に若いころの歌を歌うと胸がわくわくするような若返った気分になるんです。同じ時代に生きて同じ歌を聞いてきたもの同士、「16. 一緒に若返りたい」と思ってね」「皆で唱歌を歌うと田舎の情景なんか思い出しているんでしょうか、デイの利用者さんが涙を流したりすることがあるんですよ。そういうときに、「17. 心が通じ合う」何かがあるんです」。また、ホーム内の仲間と話すことが苦手と悩んでいた人が、デイに行ってから「18. おしゃべりが楽しい」といったように、人との関わりを楽しみを見出していた。

【認知症に対する理解】

居住者にとって、デイ利用者との関わりが楽しめるようになることと【認知症に対する理解】は同時に進行していた。「6. 認知症が理解できない」ことで戸惑っていた居住者たちは、デイ利用者に関わる回数が増えるにつれて、「19. 認知症が分かってきた」と語り、「ホームのあの人もそうだったのね。何だか変だから避けていたけど、

優しくできるようになったわ」と、認知症を発症している居住者仲間に対する気持ちの変化も見られるようになっていた。

【介護の仕事に対する理解】

デイ職員の動きを見て、「僕らは一部分しか知らないけど、職員は四六時中看ているわけだし大変な仕事です。“20. 職員には休む暇がない”です」と語った。他の福祉施設でボランティア活動を行っている居住者は、「新聞やテレビで、老人ホームの職員がお年寄りを抓ったの傷つけたとか言うけど、この仕事が分かったら介護する人の批判なんてできないですよ」と、“21. 介護現場の現実を見る”ことの重要性を語っている。また「最近僕は、できるだけ〇〇さんと暮をやってる時間を長くしようと思うようになったね。職員は他にやることがいっぱいあるからね」と、“22. 職員を助けたい”と考えるようになっていた。

【人の役に立つことが自分の喜び】

「いつ、何時に出かけるっていう目的がある

し、人のためにしてあげるってことが嬉しい」「この年になって人の役に立っていると思うと僕自身の心の栄養にもなるし、お互いのエネルギーの交換にもなります」と、“23. 受身ではなく、してあげることが嬉しい”と語っている。また、「ホームに入ってから何もすることがなくてつまらなかったけど、デイに行ったらみんなにありがたうって感謝されて嬉しいですよ」と“24. 感謝されるのが嬉しい”と語った。

「ホームに入ってから13年経つけど今が一番幸せです。いつも行くお医者さんから元気になったね。どうしたのって聞かれました」と、デイの活動を行うことの喜びを表出すると同時に、他者にも変化した様子が見て取れたということであろう。

2. デイ職員が交流・支援活動を始めた居住者をどのように見ていたか、またその見方が変化していくプロセス

デイ職員に対するインタビューの逐語録を分析したところ、表3の結果が得られた。

表3. デイ職員からみた居住者及び居住者とデイ利用者との関係

中心的意味	サブテーマ	テーマ
1. 利用者との話が續かない 2. 利用者の作業をやってしまう 3. 利用者に対して腹を立てる 4. 利用者と同じように手がかかる	(デイ職員は) 居住者の行動に戸惑う	
5. 利用者の横に座る 6. 利用者を立てる 7. 利用者を理解しようとする 8. 利用者の所に何度も足を運ぶ	居住者は利用者に気を遣う	利用者にとっての居住者
9. リラックスして一緒に楽しむ 10. 一緒に作業をする仲間 11. 友達感覚で自然な感じ	対等の関係	
12. 居ることで利用者の活動が活発になる 13. 利用者の潜在能力を引き出す	相互に刺激し合える関係	
14. 利用者の思いを大切にする 15. 利用者の行動を認めて否定しない 16. 利用者のために工夫する 17. 利用者の気持ちを尊重する	認知症対応の基本を気づかせてくれる	デイ職員にとっての居住者
18. 居住者がいてくれると安心 19. 居住者は職員と同じようだ	頼れる	

以下の文章では、テーマを【 】で、サブテーマを〈 〉で、中心的意味を“1～19”、語りは「 」で示す。

ストーリーライン

デイ職員は、居住者がデイ利用者に関わりを始めると【**居住者の行動に戸惑う**】ことが多く、居住者にはデイ利用者の相手は無理ではないかと不安を抱いた。しかし、デイ職員の不安は直ぐに払拭され、居住者は、横に座って利用者の話を最後まで聞く、相手を立てて出しゃばらないようにするなど、〈**利用者に気を遣う**〉ようになっていた。また、居住者は利用者と一緒に作業をするなど根気良く付き合うことにより、お互いの信頼関係を構築していた。そして、デイ利用者とホーム居住者との間にはリラックスして一緒に楽しめるという〈**対等な関係**〉が生まれた。また、そこから、同年代のあの人には負けられないというように〈**相互に刺激しあえる関係**〉へと発展しデイの場が活性化した。

デイ職員は、変化していくデイ利用者とホーム居住者の関係性を見ることにより、【**デイ職員にとっての居住者**】は〈**認知症対応の基本を気づかせてくれる**〉存在であり、職員にとって〈**頼れる**〉存在となった。

以下は、前述したストーリーラインに沿ってテーマごとにデイ職員の語りを引用しつつ説明する。

【居住者の行動に戸惑う】

デイ職員は、居住者に対して、デイ利用者の相手は無理ではないかという不安を抱いていた。「利用者と一緒にいても黙ってしまって、場がもてないんでしょうね。私たち職員の仕事を手伝い始めるんです」と、“1. 利用者との話が續かない”、“2. 利用者の作業をやってしまう”という状況を語った。また、「話をしてもちっとも反応ないんだよ。僕が来て役に立っているのかなって、Aさん怒って帰って行きました」と語っている。そこから、デイ職員は、“3. 居住者は利用者に対して

腹を立てる”と捉えていた。また、“4. 利用者と同じように手がかかる”と思った職員もいた。「ボランティアに来る日にちを間違えるし、これじゃあ、デイの利用者と一緒だって思いながら僕ひとりでぶつぶつ文句を言っていました」と語っていた。

【利用者にとっての居住者】

デイ職員が「職員の手伝いではなく、利用者の相手をして下さい」と、言ったことがきっかけとなり居住者たちは、〈利用者に気を遣う〉ようになった。また、職員の手伝いをしてしまう居住者に対して、「この人のお友達になってあげて下さいね、と毎回利用者の横に座ってもらったんです」と語った。その言葉を受け止めた居住者は、デイに来ると“5. 利用者の横に座る”ようになったという。そして、「ホームの皆さん、すごいですよ。ちゃんと状況が見えるようになってきて退くときは退いて利用者を立てていますよ”“6. 利用者を立てる”“この頃ですねえ、”7. 利用者を理解しようとする”のだと思います。部屋から出て行ってしまう利用者について回っていますよ」と語っている。デイ職員は、当初は怒って帰ってしまった居住者Aが“8. 利用者のところは何度も足を運ぶ”ようになっている様子も見ることにより、居住者の変化を捉えていた。居住者とデイ利用者は〈対等な関係〉になり、“9. リラックスして一緒に楽しむ”信頼関係も生まれていた。このことについて職員は「BさんとDさんは、デイ利用者の中に入ると全く違和感ないですよ。“10. 一緒に作業をする仲間”って感じです」、また「ホームの人たちが来ると、ゆっくりとした時間が流れて穏やかになるんです。リラックスできるのでしょね」と語り、別の職員は「ホームの人には私たちにない技術とか利用者とのつながりを感じます。目に見えない何か力が働くのでしょうか。“11. 友達感覚で自然な感じ”がしますね」。「デイの利用者さんたちは、上から目線を嫌うんですが、ホームのEさんがオルガンを弾きだすと、あれ、この歌一緒に歌ったことがあるよね、って、

今まで職員と一緒に歌なんて歌ったことがない男性利用者が歌い出すんです。幼馴染みと違って「いるようです」と語った。デイ利用者と居住者は「相互に刺激し合える存在」になっていた。「私たち職員がうどんを捏ねていても、今までは、あんたたちは若いからねえって見ているだけだったのに、ホームの人たちが職員と一緒にうどん作りを始めたら、利用者もうどんを捏ねたり葱を刻み始めたんです」と語り、居住者が「12. 居ることで利用者の活動が活発になっている」。加えて「13. デイ利用者の潜在能力を引き出す」結果につながっていた。

【デイ職員にとっての居住者】

「職員は忙しくて、きちんと話を聞かないものだから利用者さんが寂しい顔をする時があるんですね。でも、ホームの人は最後まできちんと話を聞いてくれるし、違うことを言ってもニコニコと受け止めている。年の功というか、器の大きさを感じます」と、「14. 利用者の思いを大切にする」、また、「15. 利用者の行動を認めて否定しない」という居住者のデイ利用者への対応について語った。

「こういうことをしたらデイの利用者が分かるかな、喜ぶのかなっていつも考えていて、「16. 利用者のために工夫をする」のですから、こちらも頑張らなくてはいけないなって思います」と語った。「Cさんのもの腰の低さとか挨拶の仕方とか、利用者と話すときなど、相手を尊重しているのが伝わってきます。話を聞くのもほんとに傾聴の姿勢ですよ」と、「17. 相手の気持ちを尊重する」姿勢から学ぶことがあると語る。このような居住者の利用者への対応を目の当たりにして、居住者は、＜認知症対応の基本を気づかせてくれる＞存在であると職員は語っている。

当初、ホーム居住者がデイに来ることを負担に感じていた職員が、今は、何かの活動をしようということになると「ホームの人に来てもらいましょう」と率先して言うようになったとのことであった。このように職員は、居住者が「18. 居て

くれると安心」と思うようになっていた。また、利用者がトイレから出てこなくなると、「○○さん、そろそろ囲碁始めましょうかってAさんがトイレの前で声かけしてくれると、スーと出て来てくれるんです。ホームの人たちって頼りになりますし「19. 職員と同じよう」です」と、職員にとって居住者は「頼れる」存在になっていた。

3. ホーム職員から見た、交流・支援活動を通しての居住者の変化

5人の居住者にデイの活動を依頼した理由と、そのときの居住者状況については前述したとおりであるが、活動開始後5人とも心身の安定と日常生活の活性化が見られ、また、認知症状の出始めた同じホームの居住者への対応もスムーズになっている。そのことを表す例として、ホーム職員へのインフォーマル・インタビューによる語りの一部をゴシック体太文字で以下に示す。

- ・ **Aさんが変わりましたね。最初は怒って帰ってきたけど、今はデイ利用者に合わせてやっているようです。**
- ・ **Aさん、90歳なのに良く頑張りますよ。デイに行く前は弱ってきた感じがしていたし、もうそろそろ今年は自転車に乗って出かけることは無理かなって思っていたのに、まだ自転車に乗っていて、娘さんのところとか結構遠くまで出かけて行きますよ。**
- ・ **Bさん、人の役に立ってるっていうのが生きがいになっているのを感じますね。ホームにいたら受身じゃないですか。ところが、デイに行けば誰かに頼りにされるっていうのが、すごく嬉しいみたいですよ。**
- ・ **BさんとDさん、はつらつとしてきましたね。自分に役目があるのって大事なことだなんて見えて思います。**
- ・ **Cさんは、ボランティア生活が長いから、デイに行く人達を気にして時々声をかけてますし、Dさんと部屋が近いからDさんの相談にのったりしてフォローしてくれています。**

- ・ Dさんは、去年と全然違いますよ。「自分が変わっていくのが分かる。ホームに入って13年経つけど、今が一番楽しい」って、笑顔が良いですよ。デイに行くと自信が付いたんでしょうね。腰痛のことも言わなくなりましたし、背筋が伸びてしゃんと歩いています。
- ・ Dさんは、ホームの〇〇さん（認知症状が出始めた人）が来ても、どういう言葉をかけたらいいか分かるようになったそうです。いやじゃなくなったって言って、食堂でも一緒にお話するようになりました。
- ・ Eさんは、デイから帰るとデイの人が好きな歌に合わせて練習しているんです。今までは教えに行くって意識だったんですけど、今は一緒に楽しんでいるみたいです。

4. ホーム職員の居住者に対する支援

1) 居住者がデイで活動を継続するための支援

ホーム職員は、居住者が活動を続けるためにどのような支援を行ったのか、職員に対するインフォーマル・インタビューと参与観察した記録を要約すると以下のとおりであった。

(1) 活動に行く居住者の状況を知る

職員は、居室訪問をして「今日は、デイに行く日ですね」と声かけをして、体調はどうなのか、デイに行くことで疲れてはいないか、心配なことはないかなどと状況の確認をしていた。

(2) デイの現場に出向き居住者の様子を確認する

職員は、居住者を送り出すとき居住者の表情を見ており、気になったときはデイの現場に実際の様子を見に行くようにしていた。居住者のデイ利用者に対する関わり方かどうか、デイ職員の期待に添えているのか否かデイ職員に聞いていた。

(3) デイ職員と居住者間の思いのズレを調整する

デイ職員から、一部の居住者がデイに来る時間が早い、また来ない日があることに対して、時間調整をして欲しいとの依頼があった。デイ職員

に迷惑がかかるから、辞めてもらったほうが良いのではないかと意見がホームの一部の職員から出ていた。しかし、デイの活動を辞めるか否かは居住者本人が決める問題として、直接居住者本人の意向を聞いていた。職員は居住者とデイ職員両方の言い分を聞いて、それぞれの思いにズレが生じていないか調整することに努めていた。また、デイ職員から提起された問題の解決策について職員間で決めてしまうことなく、活動を行っている居住者本人の意思が尊重されるように方向付けをしていた。

(4) ボランティア経験が長い居住者Cに相談役を依頼する

デイ職員や利用者とのコミュニケーションがとれず、落ち込んだ居住者たちに対して、Cが行っている他の福祉施設でのボランティア活動での経験談や、職員との関わり方などを話してくれるように依頼していた。

(5) 肯定的ストロークを送る

「ホームから支援活動に来てくれて助かっている」、「居住者のデイ利用者への関わり方から認知症対応の基本を学ばせてもらっている」など、デイ職員の肯定的評価やデイ利用者も待っているとといったことを、ホームから送り出すときやデイの活動から帰った時など言葉にして意識的に居住者に伝えていた。

(6) 居住者の活動に関心を示す

職員は、出かける前には「行ってらっしゃい」、帰ってきたときには「おかえりなさい、お疲れさまでした」と、いうように、労いの言葉を伝えていた。また、送り出すばかりではなく、今日はどのようなことをしてきたのか、デイ利用者の反応はどうであったのかと、関心を持ってその日のでき事を聞くようにしていた。

IV. 考 察

1. 対等な立場になることで構築された認知症デイ利用者とのホーム居住者の関係

デイに行き始めた当初、居住者は交流相手である利用者の認知症という病気が分からず困惑した。日本の認知症患者は2015年には250万人に達すると予想されている⁴⁾。その数から考えて誰にも身近な存在であるにも関わらず、本間⁵⁾の地域住民を対象とした認知症に対する認識について調査した研究でも、認知症はよく分からない病気として捉えられており、居住者たちも認知症利用者の言動に戸惑い、どのように接して良いか分からず緊張した。しかし、交流が進むに連れて、居住者は利用者に安心感を与え、両者の間に友達のような対等な関係が生まれている。居住者は認知症に対する知識や対応の技術を職員や専門家に教えてもらうことをしなかったが、なぜそのような関わり方ができたのだろうか。服部ら⁶⁾の研究によると、軽度認知症高齢者は思うようにならない自分を自覚し、世話になって生きるしかないことを認識し、行動の意味を分かってもらえないという経験をしていた。居住者たちも同じように、加齢とともに今までできていたことが容易にできなくなっていく体験をしていると考えられる。しかし、家族や職員が考える以上に知力と体力も残っており、そのことは居住者自身も認識しているが、老人ホームに入ったことで自身の気持ちや力をセーブし、家族や職員にも気を遣い受動的な立場になっていると考えられる。だからこそ、同じように喪失体験をした者として認知症状を持つデイ利用者に寄り添い、残された能力を認め合い、相互に楽しむことができるようになったと考える。

2. ホーム居住者とデイ利用者との間に生じたピアサポート関係

活動を行っている居住者の中には、仲間を求めて老人ホームに入ったがホームに馴染めず友人もできず孤独を感じていた人、家族と暮らして

はいても折り合いが悪く自らホームを選択して入居してきた人、夫や妻を亡くし一人になって孤独を感じていた人もいた。そのような思いを持って生活していた居住者たちが、認知症状を理解してもらえず家族や仲間から孤立していたとも考えられる同世代のデイの人たちに出会った。そして、高齢である居住者たちもいつ認知症になっても不思議ではない年代であると自覚し不安感を訴えることもあった。このように同じような体験をし、同じように孤独と不安を抱えた高齢者同士がお互いを理解し、共感し、支えあう関係が生じたといえる。このような関係はピアサポートの関係ということができ、認知症の有無を超えて生まれる可能性があることを示している。

3. 交流・支援活動への参加によるホーム居住者の生活活性化への影響

本研究の対象であるホーム居住者5人は、80歳以上の高齢者であることから、心身の機能が徐々に低下していく年齢である。活動に参加する前は職員から見ると虚弱傾向が見えていた人、引きこもりがちな生活を続けて薬に頼っていた人、病弱な妻の面倒を見ることに固執していた人、人の役に立たなくなったら生きている価値がないと自尊心を失い欠けていた人たちであった。その居住者たちが3年以上も活動を続けており、5人も活動を始めてから心身の活性化が見られている。それは、①待つ立場でなく出かけて行く立場になれたこと、②それぞれの持てる力を活用することができたこと、③他者から頼りにされ、人の役に立てることが自身の喜びであると実感できたことと関係していると考えられる。野村⁷⁾は、高齢者は生きがいを喪失しやすい危機に直面するものの、新たな生きがいの源泉や対象を見出すことで生きがいを再獲得できる力を持つと言い、河野、黒田⁸⁾は施設生活の中で特に必要とされるのは、入居者が社会との接点を維持し、社会の中で役割や責任を感じる大切であると述べている。絹川ら⁹⁾のケアハウスにおける調査

でも、自立あるいは要支援高齢者が要介護者に対してできる範囲内の生活援助をしていることが報告されている。支援や介護が必要になっても他者との関係から生じた力が生きる力になり¹⁰⁾、「他者に必要とされている」「人の役に立っている」といった感覚は、高齢者の生きる意欲を高め自信を強めることになる¹¹⁾という。木原¹²⁾は、要介護者でも人に尽くす行為をしたら、その行為をした本人に顕著な治療効果が現れるといい、そのことをボランティア・セラピーと称している。また、高齢者のボランティア活動が心身の健康への効果があることも報告されている^{13,14)}。同じように本研究においても、他者との関係性から生じた力が生きる力となり、心身の活性化及び生活の活性化につながる事が確認された。

4. ホーム居住者とデイ職員における相互に尊重しあえる関係性の構築

利用者と居住者相互の関係性ができてくると、デイ職員は利用者と根気よく付き合っている居住者を見ることにより、居住者は認知症対応の基本を気づかせてくれると共に、職員自らのケアの質を振り返る機会を与えてくれる存在であり、頼れる存在となっていた。一方、居住者は一時的に利用者に関わる自分たちと違い、認知症状のある利用者に休みなく介護を続ける現場を目の当たりにすることによって、デイ職員に対する労いの気持ちを持ち、デイ職員の力になりたいという思いを持つようになった。このように、デイ職員と居住者の間には、お互いを尊重し、それぞれの立場や役割を超えて、助けたり助けられたりという相互支援関係が生じた。

5. ホーム居住者の経験知や能力を活用することの重要性

軽費老人ホームの居住者は、ある程度の支援があれば自立した暮らしを維持することができる高齢者であり、仲間同士で切磋琢磨し職員を活用しながら¹⁵⁾柔軟性を持って生活していく力を

持っている。加えて、安全が確保された老人ホームという住環境があり、食事や生活支援サービスが提供され、在宅時に抱えていた諸々の生活不安は解消されている。職員は、そのような環境下にある高齢者を、単に保護する対象として見るのではなく、長い人生で培ってきた経験知や能力に目を向け、時に頼ることも重要である。そうすることによって居住者の残存能力も引き出され、他者に役立つ存在であることが実感できるようになり、生活の活性化及び社会生活拡大へとつながっていくのではないかと考える。

V. 研究の意義と今後の課題

近年増えている生活支援付き高齢者集合住宅では、自立が建前であっても身体機能が低下した高齢者や認知症状が出ている高齢者も混在することになるであろう。そうした住宅において、居住者の生活活性化と自立維持、関係作りに向けた支援が重要であり、今回の研究から得られた知見は広く応用できると考える。しかし今回の研究は、高齢者が認知症高齢者と交流することを通しての生活の活性化について明らかにしたものの、その可能性を引き出すための具体的な支援方法についてはまだ十分なデータ収集・分析ができていない。支援方法は、活動を行う高齢者の個性や、活動の場や相手によっても異なるであろう。そうした多様性に応じて活用できる支援方法や支援プログラムを提示するためにも、更に研究を重ねて行く必要がある。

VI. 結語

本研究は、軽費老人ホーム居住者 5 人が、ホームに併設している認知症デイサービスで交流・支援活動を実践し、その活動をする本人と彼らを取り巻く周囲の人たちがどのように変化していくのか、3年以上に渉る経過を追いその変化について考察した。

当初、認知症デイ利用者との対応に困惑したホーム居住者ではあったが、試行錯誤を繰り返して

ながらデイ利用者との関わりを楽しみ、相互に刺激し合える関係が生まれた。その両者が変化していくプロセスを見ているデイ職員も、そこから学ぶことの意味を認識し、ホーム居住者とデイ利用者、デイ職員それぞれに相互支援関係が生まれデイの場が活性化した。これらのことから明らかになったのは、高齢者は人の役に立てるといふ喜びを実感することにより、生活全般が活性化する可能性があるということ、また、同じような不安と孤独を抱える高齢者間に認知症の有無を超えてピアサポートの関係が生まれる可能性があるということである。そして、ある程度の支援があれば自立して生活できる高齢者を対象とした生活支援機能付き高齢者集合住宅は、高齢者が安心を求めて住み替えをしてきた住まいであるが、安心が得られる半面、管理・保護のもとで受け身の生活になりやすく、社会生活を狭めてしまう可能性がある。そうした場に居住する高齢者の社会生活を拡大し、活性化した生活を継続してもらうためには、個々の持てる力を支援者が引き出し、その持てる力が他者にも役立つという自信を持ってもらえるようにすること、そして高齢者相互間に相互支援関係が生まれるように配慮することが効果的である。

謝 辞

本研究は、2011年度国際医療福祉大学大学院・医療福祉学研究科・先進的ケア・ネットワーク開発研究分野における博士論文を縮小し、加筆修正したものである。

3年以上に渉り研究にご協力いただいたAホーム居住者の方々をはじめとして、デイの利用者さま、及び両施設職員の方々に、心より感謝申し上げます。また、本研究に関して報告すべき利益相反はありません。

文 献

- 1) 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 芳賀博. 地域高齢者の家庭内役割と QOL の関連. 日本保健福祉学会誌 2011;17(2):11-19
- 2) 厚生労働省, 政策レポート, 高齢者の住まい. www.mhlw.go.jp. 2012,8,28
- 3) 市川光代, 岩下清子. 軽費老人ホーム居住者の入居の経緯と適応過程. 日本在宅ケア学会誌 2010;13(2):42-50
- 4) 国民福祉の動向. 厚生統計協会 2009;56(12):119
- 5) 本間昭. 地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査. 老年社会科学 2001;23(3):340-351
- 6) 服部紀子, 安藤邑恵, 中里知広ら. 介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験. 横浜看護学雑誌 2001;4(1):63-70
- 7) 野村千文. 「高齢者の生きがい」の概念分析. 日本看護科学学会誌 2005;25(3):61-66
- 8) 河野益美, 黒田研二. 介護保険制度下の高齢者施設ケアの現状と課題. 藍野学院紀 2001;15:79-87
- 9) 絹川麻理, 加藤悠介, 三浦研ら. 高齢者の共同居住における生活行為と支援環境—ケアハウス入居者の生活を事例として—. 生活科学研究誌 2006;5:115-127
- 10) 吉尾千世子, 三村洋美, 富田真佐子. 要介護高齢者の生きる力の構成要素. 日本在宅ケア学会誌 2010;14(1):31-38
- 11) 奥野茂代, 大西和子. 老年看護学「概論と看護の実践」第4版. 東京:ヌーヴェルヒロカワ, 2009; 68-72
- 12) 木原孝久. ボランティア・セラピー—要介護者の力が生きる福祉のカタチ—. 東京:中央法規出版, 2005;3
- 13) 正野逸子, 高村昇, 中野正博ら. 日本人高齢者におけるボランティア活動の健康への効果 Acta Medica Nagasakiensia 2007 ;52(2) :45-51
- 14) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—. 日本公衆衛生雑誌 2005;52(4):293-307
- 15) 堀井真美子, 岩下清子. 軽費老人ホーム居住者が直面する人間関係の困難さとその対処—人間関係再構築の支援について考える—. 国際医療福祉大学学会誌 2012;17(1):43-54